山瀬を集める集水溝と池に送る隧道

稲穂（いなほ）のまんぷ

江戸時代中期、美作国津山城下で勃発した山中一揆で多くの人々が処刑されたのと同時期、稲穂村（現・美作市稲穂）では干ばつで年貢が納められず、一村逃村がありました。しかし、この水不足の現状は明治になっても変わらず続いていました。明治半ば、元村長の安藤茂生（もしょう）は現状を打破したいと考え、稲穂・則平の耕作者と大規模な灌漑工事を、農閑期に３年間行いました。これが「稲穂のまんぷ」と呼ばれる農業用水です。

その仕組みは、細々とした山瀬を集める集水溝とその水を貯める新池・古池・蓮池という３つの溜池でから成っています。７㌶の水田の水を一番大きな新池を中心にまかなってはいるものの、貯水量が少ないため周りの山の反対斜面に降る雨までこの池に入れようと、溝を掘りました。深さ20㎝・幅30㎝の溝が15㎞続きます。

昔のことですから現在のような道具は当然無く、水路の勾配を出すにも住民が夜ちょうちんを持って山に入り、それを下の田んぼから見て位置を決めたとも言われていますが、夕立か大雨のときにしか流れることは無かったそうです。工事で最も苦労したのが池の手前の山で、溝を掘れずトンネル（茶色部分）にしました。これが「まんぷ」と呼ばれる長さ46ｍ・高さ１ｍの素掘りのトンネルです。

山の両方から手で46ｍ掘り進み、中ほどで少し食い違ったものの、出た石もすべて人力で運んだそうです。山瀬を集める集水溝と、集めた水を池に送るための隧道で、固い岩盤やもろい岩肌を削り、長さ約46ｍのトンネルは人力で掘り抜かれ、人夫役が延べ１万人になり、これからまんぷ（万歩）と呼ばれるようになったとも、鉱山などの坑道の「まぶ」がなまってまんぷとなったという二説があるそうです。

現在はポンプ等の機械が発達しこの『まんぷ』が当時のまま使われることはありませんが、新池の水が少なくなると山の反対の長内川からポンプアップしてこの中を通しています。開削以来、今も長内（ながうち）川からポンプアップした水を通し、稲穂と周辺の水田７ｈａを潤しています。

■位置図

まんぷ・集水溝および用水路平面図

まんぷの入口周辺

集水溝

稲穂のまんぷ
トンネルが延べ１万人の人夫によって掘られたため、まんぷ（万歩）と呼ばれるようになった。

昭和26年に改修工事が行われた新池